

嫉妬の解消装置

～キリバス共和国におけるビンゴゲーム～

はじめに

- 1 キリバスの概要
- 2 ビンゴゲームの概要
 - 2-1 ゲームのルール
 - 2-2 賭け金と配当金
 - 2-3 ビッグチャンスの存在
 - 2-4 ビンゴカード
 - 2-5-1 首都方式
 - 2-5-2 離島方式
- 3 キリバスビンゴの特徴
 - 3-1 いつから始まり、どこでおこなわれるのか
 - 3-2 主催者と金の行き先
 - 3-3 いくら使っているのか？
- 4 どこの会場を選ぶのか？
- 5 なぜビンゴへ行くのか
 - 5-1 お金をめぐる話

はじめに（結論まで書き終わってから書く）

筆者は首都タラワの北に位置するアベィアン(Abaiang)島に主に滞在し、調査を行なった。調査期間は2003年7月11日から9月24日までのうち60日間と、2002年9月の延べ3ヶ月間である。

調査は女性たちについてビンゴに行き、ゲームに参加し参与観察を行なった。

1 キリバス共和国概要

うんたらかたら

オセアニア地図（作成済）

アベィアン地図（作成済）

2 ビンゴゲームの概要

2-1 ゲームのルール

・カードの概要

日本で一般的なビンゴは縦、横が3×3もしくは5×5のカードを用いる。そのカードで縦、

横、斜めの数字が一行すべてそろえば、勝者となる。しかし、キリバスの一般的なビンゴゲームでは、日本の一般的なカードとは異なるものを用いる。

キリバスで使われるビンゴカードは、縦 18×横 9 のマスがある。カードは上から 3 行ずつでくくられ、大きく 6 つの枠に分かれる。この 27 マスで構成される枠一つに、15 個の数字がはいる。そして、横の行には 5 個の数字が並ぶ。

カードには 1～90 までの数字がすべて用いられる。縦の列は、1～9、10～19、20～29、30～39、40～49、50～59、60～69、70～79、80～90 となっている。1～9 までの列には 9 個の数字しかないが、一番右の 80～90 までの列には 11 個の数字が入る。その他の列には 10 個の数字が入る。自分で作る際には、1～9 までの列と 80～90 までの列の数字の個数が違うので、注意しなければならない。

一つの枠の中では、縦列の数字の置き方に決まりがある。必ず上にある数字が下にある数字よりも若くなるようにする。

・ゲームの進行

ゲームでは、読み上げられた数字にマークをしていく。1 ゲームで基本的に二人の勝者が出る。横一行、5 個の数字がそろうと、ファーストビンゴとなる。そして、大きな枠の 15 個の数字が全てそろうと、セカンドビンゴとなる。それぞれ最初にそろった者がビンゴの勝者となる。

数字が横一行そろった者、あるいは大きな枠の数字がそろった者は、「ビンゴ」と大声をあげる。そこで、主催者側の人間がそろった者のところへと行き、そろった行もしくは枠の中の数字を大声で読み上げる。間違いがなければ、ファーストビンゴの場合はゲームが進行され、セカンドビンゴの場合はゲーム終了となる。

・一日の流れ(アベィアン島スワラブ村の教会ビンゴの例)

午後 4 時にビンゴが始まる。集まった人数は大人が 30 人前後。就学前の子どもたちが 10 人程度、母親に連れられてやってくる。1 ゲーム 10 分くらいで進んでいく。賭け金は 30 セントで始まる。

午後 4 時 30 分に第 1 回目のビッグチャンスが行なわれる。参加人数は若干増えて、35 人前後になっている。ビッグチャンスのゲームでは、賭け金が増えることが多い。賭け金は 40 セント～50 セント。ビッグチャンスが終わると、再び通常のゲームが始まり、掛け金の額も戻る。

午後 5 時に第 2 回目のビッグチャンスが行なわれる。参加人数は変わらず、35 人前後。日によっては、若干減り始める。賭け金は 40 セント～60 セントになる。ビッグチャンスのゲ

ームが終わると、賭け金の額は戻るか、40 セント程度から上がり始める。

午後 5 時 30 分には参加者が減り、15 人以下になる。賭け金の額が上がりつづけ、1 ゲーム 60 セント程度になる。参加者はカードの枠を絞ってゲームを始める。大きく 6 つに分かれている枠のいくつかだけを賭けの対象とするのである。こうすることで、たとえば 1 ゲーム 60 セントのゲームなら、6 つあるうちの 3 つの枠だけを賭けの対象として、掛け金を 30 セントに抑えることができるのである。

午後 6 時近くになると、参加者は 5 人以下になる。終了時間はとくに決まっていなかったが、だいたい 6 時 30 分までには終わる。ときおり 7 時近くまで行なわれることがあった。主催者がゲームの終わりを告げ、それぞれ家に帰っていき、一日のビンゴが終わる。

2 - 2 賭け金と配当金

キリバスで行なわれるビンゴゲームでは、ほぼ全ての会場でお金が賭けられる。賭けられる金額は、ゲーム会場や時間帯など、その時々で異なる。一般的には 1 ゲーム 30 セント～70 セント程度である。1 ゲームごとにお金を賭け、勝者は配当金を得る。一ゲームごとに賭け金の額が違い、賭け金の額が大きくなれば、配当金も大きくなる。

首都タラワのベシオで行なわれていたビンゴでは、入場時に一綴り 11 枚のビンゴカードを買うことで賭け金を払ったことになり、ゲームをすることができる。一綴り 11 枚のカードは、通常 3 ドル～4 ドルであった。アベィアンなどの離島では、ビンゴカードを自分で作っている人が多くいる。自分で作ったカードを使う人は、ゲームごとにお金を払う。その際には主催者側の人間が回って、お金を回収していく。

アベィアン島スワラブ村の教会マニアバでは、30 セントを賭けると、ファーストビンゴで 2 ドル 50 セント、セカンドビンゴで 5 ドルの配当金を得ることができる。この教会マニアバでのビンゴでは、開始からしばらくは 30 セントの賭け金でゲームを行なえるが、終了時間 6 時に近づくと、1 ゲーム 80 セントになることがある。ゲームが進行するにつれて賭け金の額が上がる理由はわからない。

1 回のゲームで賭け金が高額になった場合、6 つある大きな枠のうちいくつかに絞ってゲームを行なうこともできる。たとえば賭け金が 80 セントになった場合、6 つあるうちの 3 つだけ賭けて、ゲーム代 40 セントを払う。このように枠を絞ってゲームをしても、勝ったときの配当金は全ての枠を賭けた人と同じ額もらえる。

ゲームではファーストビンゴ、セカンドビンゴともに同時に複数の勝者が出る場合がある。スワラブ村の教会マニアバでは、複数人の勝者が出た場合、払戻金はその人数で等しく分けられていた。

2 - 3 ビッグチャンスが存在

ビンゴゲームでは、通常の勝敗とは別にビッグチャンスというものが存在する。ゲームでは、1ゲームにつき勝者は基本的に2人である。そのため、胴元には配当金を除く、賭けられた多額のお金がたまり続ける。そのお金がある程度たまってくると、ビッグチャンスとして、ゲームの勝者に払われる仕組みがある。ビッグチャンスは1日に2回程度おこなわれる。

ビッグチャンスの仕組みは、ゲームが始まる前にある任意の数字が示される。その数字がセカンドビンゴまでに出なければ、セカンドビンゴの勝者に配当金が支払われる。任意の数字がセカンドビンゴまでに出てしまった場合には、配当金は次の回にまわされる。

このビッグチャンスでは、大きな会場になると配当金が1000ドルを越すことがある。また、小さな会場でも100ドル程度まであがることもある。

・ビッグチャンスの仕組み

30人が参加する会場の場合、1ゲーム30セントの賭け金すると、1ゲームで9ドル集まる。そのうち、ファーストビンゴで2ドル50セント、セカンドビンゴで5ドルの計7ドル50セントが配当金として支払われる。残りの1ドル50セントが主催者に残る。

1ゲームは約10分で勝負がつく。午後4時から午後6時までの間に、約15回ゲームがおこなわれる。全てのゲームの賭け金の変動しなかった場合、主催者には1日で22ドル50セントが残ることになる。

いくらかの額が主催者の取り分となり、残りの額がビッグチャンスにまわされる。主催者の取り分の比率についてはわからない。ビッグチャンスの額は3ドル程度から始まり、4ドル、5ドルと上がっていく。参加者数や賭け金の額によって異なるが、30人程度の会場では1週間でビッグチャンスの額が20ドル程度になる。

ビッグチャンスは1日に2回程度行なわれる。ある会場では午後4時30分からと午後5時からビッグチャンスのゲームが始められた。ビッグチャンスがでなければ、配当金と主催者の取り分を除いた額が上乘せされ、次の回にまわされる。ビッグチャンスが出てしまうと、ビッグチャンスの額は0にもどる。3ドル程度たまるまでビッグチャンスはおこなわれない。きりのよい額がたまると、再びビッグチャンスが行なわれるようになる。

2 - 4 ビンゴカード

ビンゴカードは売られているものと、自分で作るものがある。売られているのは主にニュージーランド製で、一綴り11枚のものである。首都の大きなビンゴ会場で売られている。ビンゴ専用のマーカーも売られており、1本1ドルである。

このニュージーランド製のカードを使う場合、専用のマーカーやボールペン、サインペンなどで数字を塗りつぶしていく。そのため再利用はできない。しかし、ときおり一度使っ

1	12			44	53			82
	15	25	35				75	85
3				49	55	68	77	
	16	21	33			62	71	
7			38	40	58			84
	19	27			59	66		90
4	11		30	42				81
		23	37	46		61	72	
8		26			51		79	87
	10				52	60	70	83
5	13		31	41	50			
			39	48		69	78	86
2	17	20				64	74	
9		24	34	45				88
		29	36		57	67	76	
6	14	22		43				80
		28	32	47	54	63		
	18				56	65	73	89

たカードに違う色でマークをつけて使っている人がいた。この売られているカードを使う場合、カードを買った時点でゲーム代を払ったことになるため、再度カードを使うことはあまりよいことではない。賭け金を払わずにゲームをしていることになるためである。

首都の大きなビンゴ会場ではカードが売られているが、その他の場所では参加者が自分でカードを作っている。ダンボールなどの紙に線を引き、数字をいれていく。1～9までの列と80～90までの列は数字の数が違うので、気をつけなければならないという。線や枠の周りに模様や自分の名前を書き、装飾を施す。装飾では名前のほかに、「ビンゴが必ずくる」「今日は運がついている」と書いているものもある。高校生の女の子が「ビンゴは楽しい。ビンゴは楽しい。しかし、絶対にビンゴはこない」と書いたカードを作ったことがあった。姉がそのカードを借りてゲームをしたが、一向に勝てず、「このカードには悪いことが書いてあるから勝てないのだ」と言い、そのカードを破り捨てた。

基本的にはゲームでは自分で作ったカードを使う。しかし、親しい家族の間ではカードの貸し借りが行なわれる。借りたカードを使って勝っても、貸した人へお金が払われることはない。

基本的にはゲームでは自分で作ったカードを使う。しかし、親しい家族の間ではカードの貸し借りが行なわれる。借りたカードを使って勝っても、貸した人へお金が払われることはない。

3 キリバスビンゴの特徴

3 - 1 どこでおこなわれるのか

ビンゴゲームはたいていマニアバという場所で行なわれる。マニアバのほかに、民家や職場でも行なわれていた。

アベアン島では各村や集落ごとにビンゴの会場があった。首都のタラワでは、大きなマニアバで行なわれていたほか、深夜に小さなマニアバで行なわれていた。国立病院の事務所で医師や看護師が集まってビンゴゲームを行なっているのを見かけたこともある。

キリバスでいつから現在のようなビンゴゲームが始まったのか定かではない。何人かの人に聞いたが、30歳前の人が「私が小さかったころからビンゴはあった」と述べていた以外

には、わからないという返答ばかりであった。

同じ人から聞いた話では、ビンゴは常にあったわけではなく、ときどきなくなることもあり、必要となればまた再開するということであった。

教会マニアバでのビンゴは、現在恒常的に開かれているが、過去に何度が開かれなくなったことがあるという。しかし、必要性があって再びビンゴが行なわれるようになったということであった。この必要性が主催者側の必要性なのか、参加者側の必要性なのかわからない。現在行なわれている教会ビンゴは、教会の運営資金を得るためという側面が強く、教会側に必要性があって開かれているとおもわれる。

3 - 2 主催者と金の行き先

ビンゴゲームのなかには、主催者が明確で、教会の運営資金や冠婚葬祭の資金を賄うという目的をもつものがある。

アベィアン島スワラブ村でおこなわれていたビンゴゲームは、カトリック教会が主催していた。キリバス在住の小野賢太郎氏によれば、ビンゴは教会が主催することが多いという。教会が主催するビンゴゲームは、教会がもつマニアバで行なわれる。賭けられたお金は、配当金を除いて、教会の取り分となり、教会の運営資金となるということであった。

また、婚約式のために人が集まった民家でビンゴが行なわれていた例では、婚約する女性側の家が主催していた。集まったお金は、婚約式と結婚式のための資金となるということであった。

このように、主催者側がある目的で資金づくりをするために、ビンゴを行なっていることがある。

一方、特に主催者が明確でないビンゴ会場もある。小規模で短期間のみ行なわれていたビンゴでは、主催者が特におかれていなかった。集まった人の中で、順番に主催者の役割をまわしてゲームを取り仕切り、ビンゴを行なっていた。主催者側にたまっていくお金は、きりのよい額になるとビッグチャンスとしてゲームの賞金として配当された。主催者側の取り分はなかったと思われる。そして、最終日の最後のゲームで、残りのたまっていたお金全てが配当金となった。

3 - 3 いくら使っているのか？

次に、ビンゴに通う人々はいくらくらいのお金を使っているのか、5人の女性の例をもちいて詳しく述べていく。

Kさんの場合

Kさんは、29歳の女性。夫は日本の遠洋鯉漁船に乗っており、彼女自身も高校の事務員をしている。夫の収入は月400ドル。二人合わせた収入は月に500ドル程度とおもわれる。

彼女は月の半分程度、15日～18日間ビンゴに通っていた。1日に平均で2ドルから3ドルを使う。お金がないときにはビンゴに行かないが、お金があるときには、一日で5ドル使っている日もあった。また、夫と同じ遠洋鯉漁船に乗っていた男性を見つけると、彼女のほうからビンゴをしなさいと、2ドル渡すことがあった。Kさんは彼女自身の収入もあるのだが、月に二回ある給料日前にはお金がなくなり、母親や姉からゲーム代をもらったり、借りたりしていた。

Kさんは2世帯分の食費を払っているため、普段はあまりお金のない様子だったが、夫からの送金を銀行からおろしたときには、数10ドル単位で兄弟に渡していることがあった。夫からの送金はほとんど手をつけず、家の建築資金として貯めているようだった。筆者がキリバスを離れるときに、首都でコンクリートと大量のブロックを買っていた。

ゲームに勝った際の配当金の使い方は、3ドル未満の小額の場合、その日のゲーム代にすべて使っていた。母親や姉がゲーム代を求めるため、一瞬にして配当金は消える。高額の場合、彼女のほうから母親や姉に配当金の一部を渡す。一日のゲームの流れでは、遅い時間のゲームほど賭け金の額が上がる。そのため、六つあるうちの一枠にのみ賭けるなどして、ゲームを続け、残りの額がきりのよいところで、ゲームを終了する。残りのお金は、その日の夕食代に消え、手元にはほとんど残らない。

Aさんの場合

Aさんは35歳の女性。夫はタラワとアベリアン間の定期船船長であり、Aさんは働いていない。収入は月に150ドルから250ドル程度とおもわれる。Aさんは家を建築中のため、お金が必要な様子だった。建築中の家はコンクリートやブロックの家ではなく、パンダナスの葉で編んだ屋根と、パンダナスやココナツの木を利用した家である。パンダナスの葉が大量に必要なため、少しずつ近所の人から買っている様子だった。しかし、コンクリートやブロックの家と比べると、かなり安く家を建てられると聞いた。

Aさんはほぼ毎日ビンゴに通っていた。夫のT氏は月に3～7日程度しかビンゴに来てなかった。Aさんが一日に使う額は3ドルから5ドル。彼女はよくゲームに勝っている姿を見た。一日のうちにセカンドビンゴを3回出している日もあった。

ゲームに勝った際、彼女はよく妹たちからゲーム代を求められる。一旦は渋るが、1ドルずつ程度わたす。母親に対しては、高額なビンゴが出た際に幾らかずつまとまったお金を渡していた。50ドルのビッグチャンスを出した時には、10ドルを母親に渡し、硬貨を幾らかずつ妹たちに渡していた。

Tさんの場合

Tさんは60歳前後の女性。夫は数年前に亡くなっている。現在は三男夫婦と娘二人とともに暮らしている。収入はなく、息子や娘たちから生活費やビンゴゲーム代をもらっていた。Tさんはほぼ毎日ビンゴにかよう。ビンゴ会場の教会マニアバまでは、彼女にとっては遠い

ため、息子や娘がバイクで送り迎えする。モーターバイクがないときには、孫の自転車を
使い、会場まで行く。

Tさんが一日に使う額は1ドルから2ドル程度。首都に行った際に、ビンゴで50ドルちか
く使い果たしてしまい、娘たちから笑いものにされていた。

Tさん自身の収入はないため、娘たちからゲーム代をもらう姿がよくみられた。働いている
娘や息子から、時々まとまったお金を渡されていた。Tさんから娘や息子にお金を渡す様子
は見られなかった。

Mさんの場合

Mさんは22歳女性。再婚した夫はカトリック系私立高校の英語教諭をしている。Mさん
自身は働いておらず、月の収入は300~400ドル程度と思われる。彼女はほぼ毎日ビンゴに
通っていた。一日に使う額は2ドルから3ドル程度。夫は家の近くの高校にあるマニアバ
でビンゴをしているのを数回見かけた。

配当金は、小額であれ高額であれ、求められない限り姉たちや母親にお金を渡すことはな
かった。ゲームを早めに切り上げ、日が沈まないうちに帰えることが多かった。

100ドルのビッグチャンス当たった際には、母親に10ドル渡していた。その後、首都へ夫
とともに買い物にでかけた。

Bさんの場合

Bさんは30歳女性。夫は兄が経営する卸問屋の手伝いや高校の調理員の仕事をしている。
Bさんは働いておらず、月の収入は200ドル程度と思われる。Bさんはほぼ毎日ビンゴに
通っていた。一日に使う額は1ドルから2ドル程度。親戚の家でビンゴが行なわれている
期間は、教会マニアバではなくこの親戚の家に行っていた。

お金の貸し借りをあまりおこなわず、ビンゴに勝った姉妹にお金を求めるようなこともな
かった。義理の姉のほうから時々いくらか渡されていた。

その日に使うと決めた額を使い切ると、すぐに家に帰っていた。

ほかの女性たちも1日で2ドルから3ドル使っているように思われた。これは、ゲームの
賭け金が30セントの時に、午後4時から5時30分まで、10ゲーム前後をこなす人が多か
ったことから推測される。

ビッグチャンスの額があがってくると、賭け金も40セント~60セントまで上がり、使う額
が大きくなっていく。しかし、1日に2回程度のビッグチャンスの時間には、複数枚のカー
ドをならべ、勝負していた。1枚のカードにつき50セントとしても、5枚6枚とならべて
ゲームを行えば、1ゲームで2ドル~3ドル払うこととなり、1日分のお金を使い果たし
てしまうことになる。しかし、次のビッグチャンスの時間までゲームを続けている人が大
半だった様子から、ビッグチャンスの額が大きくなっていくと、ビンゴで使う額も1日5

ドル～7ドルとあがっていると思われる。

4 この会場を選ぶのか？

ビンゴに通う人々は、何を求めてビンゴに行くのだろうか。この章では、アベリアン島スワラブ村で三つの会場ができた十日間の様子から、会場を選ぶ要素について述べていく。そして、何を求めてビンゴに行くのかを考えてみる。

スワラブ村では、8月の終わりに3つのビンゴ会場があった。一つは普段から教会が主催し、教会マニアバで行なわれていたものである(以下 教会ビンゴ)。二つ目は婚約式をおこなう女性の家が主催し、この女性の家で行なわれていたもの(以下 婚約ビンゴ)。そして、高校のマニアバで行なわれていたものである(以下 高校ビンゴ)。この高校マニアバで行なわれていたビンゴの主催者はわからなかった。

参加人数は教会ビンゴが、一日平均40人程度。婚約ビンゴは、一日平均25人程度。高校ビンゴの参加者は一日平均5人程度であった。教会ビンゴの参加者は主に婚約する男性側の親族と普段から教会マニアバへ行く人々であった。婚約ビンゴの参加者は婚約する女性側の親族と、普段教会マニアバへ行く人の一部であった。高校ビンゴの参加者は男性がやや多い。高校の教員や高校周辺に住む人、首都から帰省している人々であった。

教会ビンゴは、この十日間で少しずつ人数が増えていった。首都や周辺の島から帰省している人や、婚約する男性側の親族が参加していたことと、ビッグチャンスの額が上がり続けていたからである。婚約式が行なわれた三日間は、村人総出であったため、この期間はいずれの会場もビンゴがおこなわれなかった。しかし、婚約式が終わった次の日は教会ビンゴのビッグチャンスの額が70ドルとなっており、参加人数が急増した。そして、その日にはビッグチャンスが出ず、次の日のビッグチャンスの額が100ドルとなった。ビッグチャンスの額が100ドルとなった日は、参加人数が100人近くにまでなった。

距離的要因

3つのビンゴ会場の位置は、教会マニアバから婚約を行なう家までは北へ400mほど離れていた。婚約式を行なう家から高校マニアバまでは400mほど離れている。

ビンゴに通う手段は、ほとんどの人が徒歩である。一部の人がバイクや自転車で通っていたが、少数である。

第二章三節で述べた、Kさん、Aさん、Tさん、Mさん、Bさんを例にとってみる。この四者のうちKさん、Tさん、Bさんの家は同じ位置にあり、高校ビンゴの会場と婚約ビンゴの会場まではほぼ同じ距離である。そして、教会ビンゴの会場が最も遠い。Mさんは高

校ビンゴの会場のすぐそばに家があり、婚約ビンゴ会場、教会ビンゴ会場の順に遠くなる。Aさんは婚約ビンゴの会場のすぐそばに家があり、高校ビンゴの会場と教会ビンゴの会場まではほぼ同じ距離である。

Kさん、Tさん、Bさんのうち、KさんとTさんは教会ビンゴ以外には行かなかった。Bさんのみが十日間のうち一週間、婚約ビンゴに通っていた。三人とも高校ビンゴには行かなかった。

Mさんは高校ビンゴの会場が最も近いのだが、高校ビンゴには一度も行かなかった。婚約ビンゴには一日行ったのみで、ほかの日は教会ビンゴに行っていた。

Aさんは婚約ビンゴの会場が最も近いのだが、婚約ビンゴには一度も行くことはなく、教会ビンゴにしか行かなかった。

5人は「遠いから歩くのが大変だ」という語ることはあっても、遠いから行かないということとはなかった。ビッグチャンスの額が大きくなるにつれて、二つ先の村からも歩いて通う人がでたことから、ビンゴ会場までの距離はビンゴ会場を選ぶ要因とはならないと考えられる。

規模的要因

3つの会場は規模が異なる。会場の広さと集まる人の人数について考えてみる。

会場の規模は、教会のマニアバは15m×40mほど。婚約ビンゴが行なわれる民家は3m×10mほど。高校マニアバは5m×15mほどの大きさである。民家と高校マニアバは伝統的な造りの建物だが、教会マニアバはコンクリートとトタン屋根の造りである。

参加人数は、教会ビンゴが多い日で100人くらい。少ない日で30人ほどであった。婚約ビンゴは25人～40人くらい。高校ビンゴは5人～10人くらいであった。教会ビンゴと婚約ビンゴの参加者は9割以上が女性であるのに対し、高校ビンゴは男性が6割ほどいた。

十日間で教会ビンゴと婚約ビンゴの参加人数は少しずつ増えつづけた。婚約ビンゴの会場は30人もはいるといっぱいとなる。参加人数では教会ビンゴに劣るが、毎日熱気に満ちていた。教会ビンゴの会場は、普段から30人～40人はいるのだが、100人ちかくなった日には、異常な熱気に満ちていた。参加するのは主に女性であるため、小さい子どもも大勢会場にいた。そのため、教会マニアバ内には120人ちかい人がいたことになる。

Mさんは婚約式前の一週間のうち、婚約ビンゴへ1日間、教会ビンゴへ6日間通っていた。Mさんが教会ビンゴの会場へ行った日に、なぜそちらに行ったのか聞いたところ、「今日はこっちのほうがいいと思った」という理由であった。筆者がMさんが婚約ビンゴへ行ってたことを思い出し、理由を聞いたところ、「早く始まっていたから」と答えた。さらに話を聞いてみると、婚約ビンゴへ行った日は、婚約ビンゴに行ったあと、教会ビンゴにも行ったということだった。その日、教会ビンゴよりも婚約ビンゴのほうが早く始まっていた

ため、Mさんは婚約ビンゴへ行き、ビンゴをしていたのだった。しかし、途中で婚約ビンゴから教会ビンゴに移動したということだった。

筆者はKさんと一緒にビンゴへ行くことが多かった。ある日、Kさんに「婚約ビンゴにはいかないのか」と聞いたところ、「あっちには行かない」と答えた。「婚約ビンゴのほうが勝てるのではないかと誘ったが、「そうかもしれない」と答えたのみで、行こうとはしなかった。

人数が多い会場のほうが、にぎやかで盛り上がる。また、勝った時に多くの人から賞賛されたり、注目を集めることができる。その快感を得るために、人数の多い会場を選んでいくということが考えられる。

規模の大きい会場を選んでいる事に関して、次のようなことも考えられる。教会ビンゴは婚約ビンゴや高校ビンゴに比べて、参加者の人数が多い。ビンゴゲームでは、参加人数が多いほど勝つ確率が低くなる。しかし、敢えて人数の多い教会ビンゴを選ぶということは、規模の大きさ以外の要素によって人々が会場を選んでいる可能性も考えられる。規模の大きさと違ってくるのは、ビッグチャンスの有無やビッグチャンスの額の上昇率である。規模の大きさと関連して、金銭的な要因が会場を選ぶさいに重要なのではないだろうか。次に、金銭的要因について考えてみる。

金銭的要因

3つの会場は賭け金の額やビッグチャンスの有無が違う。

教会ビンゴは賭け金が30セント～80セント。一日のうちでも時間が遅くなると賭け金の額が上がる。30セント賭けるとファーストビンゴで2ドル50セント、セカンドビンゴで5ドルの配当金を得ることをできる。ビッグチャンスの額は3つの会場ができた日の20ドルから、婚約式の2日後の100ドルまで上がりつづけた。

婚約ビンゴは、賭け金40セント。40セント賭けるとファーストビンゴで3ドル。セカンドビンゴで5ドル30セント程度であった。ビッグチャンスはなく、主催者にたまるお金は婚約式のお金に回っていた。

高校マニアバでの賭け金、配当金についてはわからなかった。

婚約ビンゴにはそれなりに人が入っていたが、教会ビンゴでのビッグチャンスの額が70ドルを越えると、ほとんどの人が教会ビンゴに行っていた。ビッグチャンスが100ドルになった日、婚約ビンゴには人がおらず、教会ビンゴに集まっていた。婚約ビンゴの参加者は、ビッグチャンスが出てしまった後に、婚約ビンゴの会場に戻り、ビンゴをしていた。賭け金と配当金の額が、婚約ビンゴと教会ビンゴでは若干違うが、さほど差はない。しかし、婚約ビンゴにはビッグチャンスがなく、教会ビンゴにはビッグチャンスがある。ピッ

グチャンスの額が 100 ドルになった日、婚約ビンゴから教会ビンゴへと人が流れたことから、人々が大金を得ようとしていた様子うかがえる。このことから、金銭的な要因もビンゴ会場を選ぶ要因の一つとして考えられる。

しかし、ビッグチャンスの額が高額でない限り、婚約ビンゴの参加者が婚約ビンゴから教会ビンゴへと流れなかった。人数が教会ビンゴよりも少ない分、婚約ビンゴのほうが勝つ確率は高い。そのため、普段は婚約ビンゴに行き、ビッグチャンスのときだけ教会ビンゴに行くというのは、お金を得る目的であれば賢明な手段である。しかし、婚約式の資金を集めるという目的のもとで婚約ビンゴがおこなわれていたことから、縁故的な要因で普段は婚約ビンゴへ行っていたということも考えられる。つぎに、縁故的的要因について考えていく。

縁故的的要因

三つの会場のうち、婚約ビンゴの会場には、婚約する女性の親族の姿が多く見られた。婚約ビンゴの会場で見られた人の多くは、周辺の村や首都、他の島々からやってきた親族の人たちである。普段から教会ビンゴへ通う婚約する女性の親族は、教会ビンゴか婚約ビンゴの会場のどちらかを選んでいく様子だったが、婚約する女性に近い親族関係の人は婚約ビンゴへ行く日が多かった。

婚約する男性側の親族の多くは、教会ビンゴの会場へ行っていた。婚約する男性の父親は教会の神父であり、男性側の親族たちは教会マニアバで寝泊りをしていたからである。普段から教会ビンゴに通う男性側の親族は、会場を変えることがなかった。

Bさんは婚約をする女性の親戚であった。Bさんは普段教会ビンゴに参加するのだが、婚約式前の一週間は婚約ビンゴに参加していた。Bさんに理由を聞いたところ、「私は彼女（婚約する女性）の親戚だから」と答えた。

BさんはKさんの義理の姉である。そのため、Kさんは婚約する女性の遠い親戚にあたる。しかし、Kさんは婚約する女性の家と、普段からほとんど交流している様子はなかった。3つの会場があった期間中、Kさんは婚約ビンゴには行かなかった。私が婚約ビンゴのほうがいいのではないかと聞いたところ、教会ビンゴのほうに私は行きたいのだと語った。理由を聞いたが、「(筆者に対し)婚約ビンゴに行きたかったら、行ってもかまわない」と述べただけで、理由を言わなかった。

私がBさんについて婚約ビンゴに行ったところ、Kさんはしきりに「どうだった」と聞いた。そこで私が「すぐに負けてしまって、お金が無くなったので帰ってきた」というと、そうかと笑い、周りの人に負けてお金が無くなったことを話していた。Kさんは婚約ビンゴのほうを気にはしていたが、自らは行かなかったのである。そして、Kさんは実の姉妹や母親とともに教会ビンゴに行っていた。

新郎側の親族は新郎の親族が集まる教会ビンゴへ、新婦側の親族は新婦の親族が集まる婚約ビンゴへと行っていることから、縁故的な要因はビンゴ会場を選ぶ上で重要視されていると思われる。また、BさんとKさんの例から、本人とより縁故関係が強い人がいる会場を選んでいくということが考えられる。

以上、距離的要因、規模的要因、金銭的要因、縁故的要因について考えてみた。ビンゴの会場を選ぶさいに、家から一番近い会場を選ぶことはなく、遠い人では2つ先の村から歩いて通う人もいたことから、距離は会場を選ぶ要因ではないと考える。

規模に関しては、規模が小さいほうが勝つ確率が上がるにもかかわらず、人数の多い教会ビンゴを選んでいく人がいた。これは、人数が多いほうが盛り上がり、勝った時により多くの人々の視線を集められるからという理由も考えられる。しかし、多くの人がいるからという規模的要因のほかに、金銭的な要因、縁故的な要因があったと思われる。

金銭的要因に関しては、ビッグチャンスの額が大きくなった時にだけ婚約ビンゴから教会ビンゴへと人が流れたことから、得られる配当金の額が高ければ要因となるが、そうでなければ縁故的要因のほうが重要視されていると考えられる。

縁故的な要因については、婚約ビンゴが婚約式の資金を集める目的をもっていたことが、大きく関わっていると思われる。婚約ビンゴは、親族でビンゴを主催し、ビンゴで得られる上がり金を婚約式の資金にまわしていた。そのため、新婦の親族は婚約ビンゴへと行っていたと考えられる。新郎側に関しては教会ビンゴの上がり金が婚約式にまわっていたかどうか確かめることができなかった。しかし、新郎の父親が教会の神父であることから、新郎側の親族が教会ビンゴへ参加していたのだと考えられる。このような理由から、縁故的要因はビンゴ会場を選ぶさいに重要視されていると考える。

距離的要因 < 規模的要因 < 金銭的要因 < 縁故的要因

5 なぜビンゴへ行くのか

なぜビンゴへ行くのだろうか。前章ではビンゴの会場を選ぶ要因として、金銭的要因と縁故的要因が強いと指摘した。ビンゴ会場ではしばしばお金のやり取りがみられ、このやり取りは親しい親族間、家族内で活発に見られた。ビンゴに行くことは、お金を得るという目的のほかに、金銭をやり取りするという目的もあるのではないだろうか。

この章では、金銭のやり取りをすることもビンゴに行く理由となっているのではないかと、支店から、お金のやり取りに注目していく。

5 - 1 お金をめぐる話

ビンゴ会場を選ぶ要素として、金銭的要因が強く関わっていると思われる。実際に、「今日は勝って帰ろう」と言われることや、「お金をかせぎにいこう」と誘われることが多かった。しかしゲームに勝った際に、お金を稼ぎに行こうと言っておきながら、配当金のほとんどを周りに人に渡していることが多々あり、非常に奇妙に感じられた。この節では、お金に関する人々のやり取りを詳しく述べていく。

お金を渡す

A さんはある日、50 ドルのビッグチャンスを手に入れた。50 ドルの中から A さんは 10 ドルを彼女の母親に渡し、1 ドルから 2 ドル程度ずつ妹たちに渡した。妹たちはそのお金をすぐにゲーム代として使い始めた。しかし、すぐにすべて使ってしまい、妹たちのほうから A さんにお金をくれるよう頼んだ。A さんは少し怒ったような様子だったが、50 セントずつ渡した。残りの配当金を彼女は生活費に回しているようだった。そして、刻みタバコを買い、すぐに吸えるように作って、次の日のビンゴに販売用に持ってきていた。

K さんはビンゴに行った際、かつて日本の遠洋鯉漁船に乗っていた男性を見つけた。男性は妻のそばに座り、ゲームを眺めていた。男性は K さんの夫と同じ船に乗っていたこともあり、筆者に日本語で親しく話し掛けてきた。K さんは男性のそばに座り、ビンゴをしながら 2 ドル硬貨を渡した。男性は手のひらに乗せられた硬貨を見たあと、慌てたような様子を見せ、男性はそばに座っていた彼の妻に硬貨を見せて渡そうとした。しかし、K さんが彼にゲームをするよう促した。少し迷った様子だったが、「ありがとう」と言い、ビンゴを始めた。

また、K さんはセカンドビンゴをあてて、9 ドルの配当金を得たことがあった。この時、配当金を渡しにきた女性が、自分が売っていたタバコを 2 本渡し、配当金の中から 40 セント取っていった。K さんとこの女性の間で言葉のやり取りはなく、女性がタバコを K さんの前に投げ渡し、一瞬目配せをし、お金を取っていった。K さんは特に反応もせず、次のゲームの用意を始めた。そして、配当金を握り、その中から 1 ドル 50 セントをゲームを終えて座っていた義姉に渡した。娘に硬貨を持たせ、離れたところに座っていた姉と母親にも持って行かせた。娘と姉の子どもたちには、お菓子を買って与えた。

ビッグチャンスで多額の金を手に入れた際、あるいは賭け金が大きく払戻金も多いゲームで勝った際、親しい家族だけでなく近くに座っている親族に対して、いくらかずつお金を渡す姿が見られた。お金を渡されたほうは、再びゲームを始めた。また、ゲームに勝った人は家族や親戚の子どもたちにお金を渡し、お菓子を買わせていた。

賞金が払われる際に、タバコやお菓子を買っている人たちが近づき、物を買わせることがある。勝者は拒むことはないし、いやな顔をすることもない。むしろ、多めに買って家族

や親戚に振舞う。

お金をもらう

Kさんはビンゴに行くためには軍資金が必要なのだが、たまにカードだけを持って会場に行くことがあった。そのときは親しい家族から金を借り、ゲームをしていた。勝った場合にはお金を返していたが、勝てなかったときにはそのままだった。次の日に返すかと思いきや、相手が思い出して要求しない限り返すことはなかった。

Mさんはゲームを始める前に、姉からお金を借りてビンゴを始めた。しばらくして、ファーストビンゴを当て、筆者に姉に1ドル持っていくように言った。そこで、筆者が離れたところに座っていたMの姉に1ドル差し出すと、「私が渡した額には足りない」と言って、Mさんのほうをにらみつけた。しかし、お金を受け取り、またゲームをはじめた。筆者がMさんのもとに帰り、座っていると、「何と saying いたか」と尋ねてきた。足りないというようなことを言っていたと言うと、そうだろうというように笑っていた。

また、Kさんはよくゲームに勝った姉や妹にお金をもらっていた。ビンゴをしていて、持ち金が少なくなってきたときに、姉や妹が勝つと、筆者や娘にお金をもらってくるよう頼む。近くに姉や妹が座っている場合には、「お金」と言って、お金をもらう。もらったお金はその日のゲームにすべて使っていた。

ビンゴで勝った人が親しい家族であった場合、しばしばゲーム代をせびる姿が見られた。この場合、求められたほうは、たいていお金を渡す。もらったほうは、その日のゲームでもらったお金を使い果たす。求めた金の使い先が食費などの生活費になることはなかった。

自らお金を得る

マニアバには毎日多くの人が集まる。ほとんどが女性のため、子どもたちも多く集まる。ビンゴがいったん始まると、子どもたちが騒がないように、親は注意を払わなければならない。しかし、親自身も読み上げられる数字に集中するため、子どもの面倒を見られなくなる。そういったときに便利なのが、おやつ存在である。

ビンゴの参加者の中には、手作りのお菓子をもち寄る人がいる。お菓子には、ココナッツの中身を削ったTe benとザラメを煮からませ、一口大に丸めたものなどがある。ほかには、緑色やピンク色の蒸しパン、魚風味のスナックなどである。また、時々ではあるが、袋ボン菓子やキャンディーなどの首都から仕入れたものが売られていた。これらの収益は、持ち寄った人のものである。

値段はココナッツボールが1つ10セントか20セント。蒸しパンは30セント。魚風味スナックは30セント~50セント。袋ボン菓子は50セント。キャンディーは20~30セントである。

お菓子のほかには、タバコも売られる。キリバスでの主流は、きざみタバコである。ビンゴに集まる人の中には、パンダナスの葉で包んですぐに吸えるようにタバコを作って持ってくる人がいた。1本が20セント。女性もよくタバコを吸うため、その日の参加人数にもよるが、そこそこの収益を得ていた。

ビッグチャンスの額が上がってくると、参加人数も膨らむため、子どもの人数も多い。いつもはココナツボールとタバコしかみられなかったが、参加人数が増えてくると、お菓子の種類も増えた。

ビッグチャンスのゲームに勝った人には、配当金が渡されるが、そのときに配当金の一部はお菓子やタバコへと変わって渡される。勝った人は、それをとがめることはない。

このように、ビンゴ会場ではさまざまなお金のやり取りが行なわれている。ビンゴで勝って収益を得るだけでなく、お金の貸し借りや受け渡しが生発に行なわれる。これらの行為は、限られた社会の中で必要な振る舞いであると考えられる。

ビンゴに行くことで、お金を介したやり取りを行ない、社会的な均衡を保っているのではないだろうか。

結論 検討中

風間論文から引用予定

ポーラオイ(=平等、均等)理念

財を持つものは鷹揚に振舞わなければならない

ビンゴに行ってお金を使うことで、お金を持っているが使っているということを見せているのではないか？

偶然に得た配当金をまわりにいる人に渡す 再分配

平等性を作り出しているのでは？

お金のやり取りや受け渡しが特に目立っていた Kさんと Aさん

Kさん、Aさんともに現在家を建築中

家を建てるお金を貯めてはいたが、妬みをかかわないように、お金を使っていた可能性

とくに Kさんは現金収入が多いほうなので、「持つもの」として贈与を繰り返さなければならない

ポータキなどの特別な場ではなく、また日常的な場でもなく

ビンゴはお金をやり取りするには都合のいい場なのではないか